

職場における熱中症の発生状況（茨城県内）

熱中症の発生状況（休業4日以上 の労働災害）

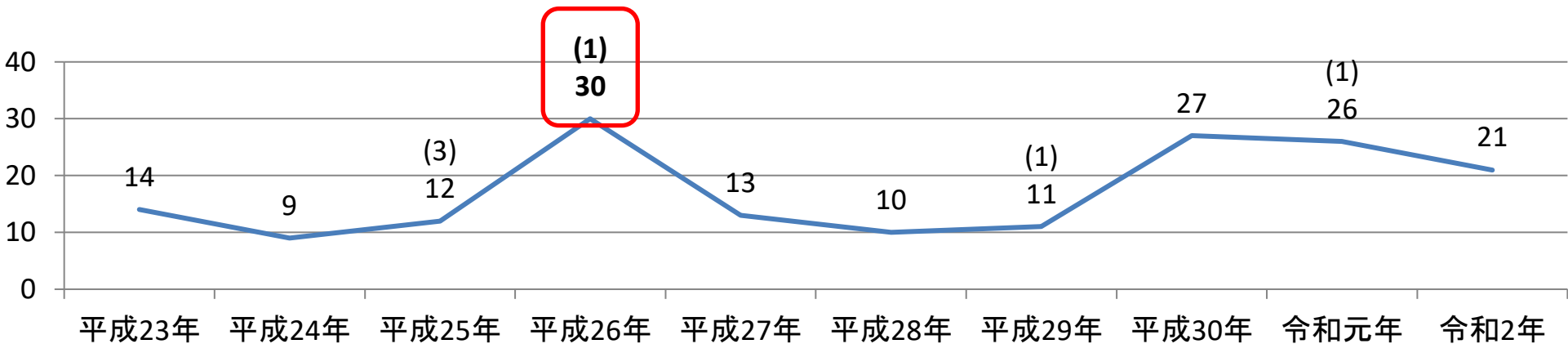
		平成23年	平成24年	平成25年	平成26年	平成27年	平成28年	平成29年	平成30年	令和元年	令和2年	計	
発生件数		14	9	(3) 12	(1) 30	13	10	(1) 11	27	(1) 26	21	(6) 173	
年齢別	～19歳	1	2		2			1	2			8	
	20～29歳	2	1	(1) 1	7	2	3	3	2	3	2	(1) 26	
	30～39歳	6	2	(1) 3	4	2		3	5	4	5	(1) 34	
	40～49歳	3	2	(1) 3	7	1	3	1	4	4	8	(1) 36	
	50～59歳	1	2		5 (1) 5	6	2		7	8	4	(1) 40	
	60歳～	1			5	2	2 (1) 3	7 (1) 7	2	(2) 29			
業種別	製造業	3	2		3	8	4	4	3	8	7	5	47
	建設業	4	3	(2) 4	(1) 9	5	4	(1) 2	3	4	4	(4) 42	
	運送業	2	1			3	2		2	6	4	3	23
	警備業						1	1		2	3	1	8
	ゴルフ場		1		1	2			1	1 (1) 3	1	(1) 10	
	その他	5	2	(1) 4		8	1	1	3	7	5	7	(1) 43
性別	男	13	9	(3) 9	(1) 24	13	8	(1) 8	24	(1) 20	17	(6) 145	
	女	1			3	6		2	3	3	6	4	28

資料出所 労働者死傷病報告による なお、()内は死亡者数で内数

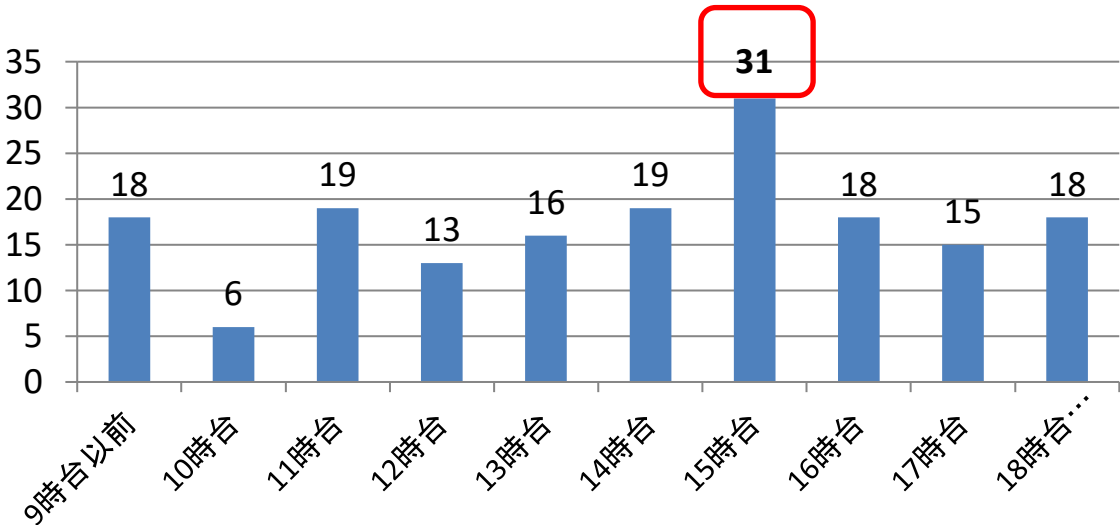
熱中症による発生件数の推移

職場での熱中症による死傷者数は、平成23年以降、平成26年の30人が最も多く、業種別では製造業及び建設業の2つの業種で全体の半数(51%)を占めています。死亡災害は、平成25年に3人、平成26年、29年及び令和元年に1人発生しています。特に梅雨明け直後の暑さに慣れるまでの間は、十分に休憩を取りながら徐々に身体を慣らす熱への暑熱順化とともに、その後も暑さ指数に応じて、作業の中断や短縮などにより熱中症を予防しましょう。

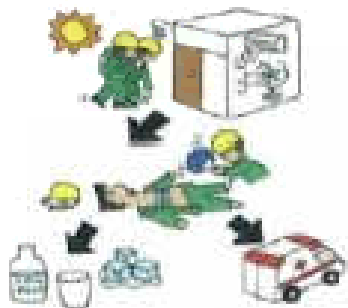
熱中症の発生件数の推移



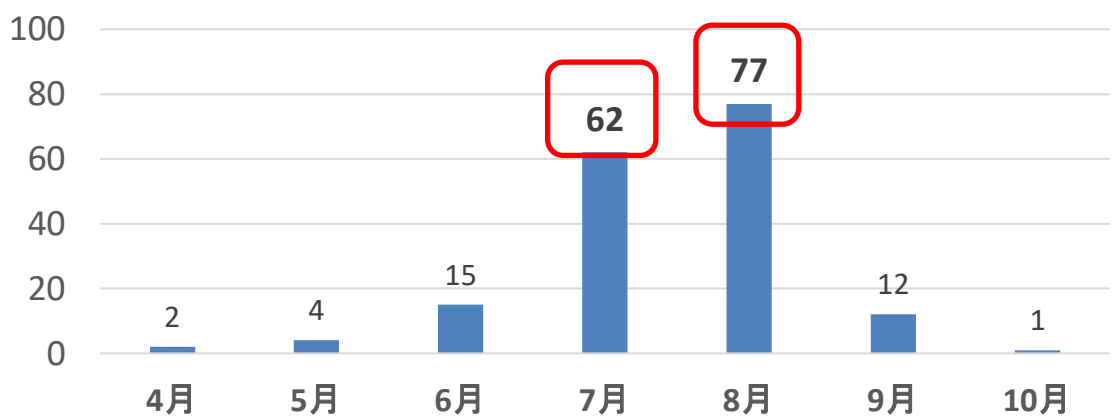
時間帯別発生状況



時間帯別では、ほぼ平均的に発生していますが、特に**15時台に最も多く発生**しています。また、日中の作業終了後に、帰宅してから体調が悪化するケースも散見されますので、体調に異変を感じたらすぐに病院へ行くか、救急車を要請しましょう。



月別発生状況



月別では、**7月と8月に集中**して発生しています。梅雨が明けた後は、気温が上昇し熱中症が発生しやすくなります。

職場における熱中症の死亡災害事例(茨城県内)

業種	地域	年齢	気温*	発生状況
建築 工事業	県南	40歳台	32.9℃	被災者は、木造家屋新築工事現場で午前中から作業を行い、作業終了後片付けをしていたが、午後4時頃に現場内で倒れているところを発見されて、救急車で病院に搬送されたが、同日に死亡した。
土木 工事業	県南	50歳台	32.1℃	被災者は、道路建設工事現場で除草中、午後3時頃に自力で歩くことができない状態になったため、社用車で病院に搬送されたが、同日に死亡した。
その他の 接客 娯楽業	県西	60歳台	32.2℃	被災者は、ゴルフ練習場内で芝刈機の調整中、気分が悪くなり休憩していたが、体調が回復しないため、救急車で病院に搬送されたが、16日後に死亡した。なお、環境省熱中症予防サイトによるWBGT値(暑さ指数)は31.3℃。
その他の 建設業	県南	20歳台	35.0℃	被災者は、午前中から除草作業を行い、午後に単独で除草中、午後4時50分頃に現場内で倒れているところを発見されて、救急車で病院に搬送されたが、9日後に死亡した。
小売業	県南	30歳台	35.8℃	被災者は、コンクリートミキサー車を運転し、工事現場に生コンを納品後、汚れた道路を清掃中、倒れてけいれんを起こしたため、救急車で病院に搬送されたが、翌日に死亡した。
建築 工事業	県西	70歳台	35.3℃	被災者は、木造家屋解体工事現場で散水中、熱中症によりコンクリート床面で倒れて、転倒時に保護帽を着用していたが、あご紐が緩くて外れたため、頭部を強打したことから、救急車で病院に搬送されたが、7日後に死亡した。なお、環境省熱中症予防サイトによるWBGT値(暑さ指数)は30.4℃。

* 工事現場の気温が不明な事例については、気象庁ホームページで記載されている現場近隣の観測所における気温を参考値として示している。

守らないとイエローカード

～熱中症対策十か条～

1. 「熱中症」の危険の認識
2. 熱中症指標計による『WBGT値』の測定
3. 作業時間の短縮と涼しい場所でのこまめな休憩
4. 高温多湿な作業には1週間以上かけての体の順化
5. 熱輻射を反射するような白い作業服や保護帽の着用
6. 作業前後及び作業中の水分及び塩分の摂取
7. 次の症状が出たら直ちに休憩
「めまい」「失神」「筋肉痛」「筋肉の硬直」「大量の発汗」
「頭痛」「気分の不快」「吐き気」「嘔吐」「倦怠感」「虚脱感」
8. 日頃からバランスの良い食事の心がけ
食べ過ぎ・飲み過ぎ注意、ウェイトコントロールの心がけ
9. 適度な運動の日頃からの実践、体力の維持・増進
10. 十分な睡眠、疲労回復

熱中症防止対策グッズ

- I. WBGT値(暑さ指数)の測定
・熱中症指標計
- II. 発症者に対して応急手当を行うのに必要な物
・冷却剤
(水のう、アイスバックなどと、冷水を作るために十分な水)
・冷たいおしぼり
・送風器具(送風できるもの。うちわ、扇風機など)
・水(可能ならばその中に水を入れておく)
・食塩水(塩分濃度0.1～0.2%)
・スポーツドリンク(ナトリウム40～80mg/100ml)
・経口補水液等

茨城産業保健総合支援センター
茨城労働局労働基準部

熱中症にレッドカード(救急処置)

重症度 熱中症かもしれない《症状》

